

Title	ノヴェッラの証言：三大ノヴェッラ集より見た中世 フィレンツェの特殊性(その2)
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 71(1-3) p.161-p.177
Issue Date	1986-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81098
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ノヴェッラの証言

——三大ノヴェッラ集より見た中世フィレンツェの特殊性—— (その2)

イタリア語科 米 山 喜 晟

Le influenze delle guerre Montaperti-Benevento sulla
civiltà fiorentina testimoniate dalle novelle fiorentine

Yoshiaki YONEYAMA

Il riassunto sarà aggiunto alla parte III con la conclusione.

第二章 三大ノヴェッラ集においてフィレンツェ市民はいかなる 関係を持ちどんな役割を演じているか

第三節 市の内外の中小貴族たちとの関係

フィレンツェ市民が関係した貴族階層の中で、君主や傭兵隊長については前章で論じたが、はるかに頻繁に、密接な日常的関係を有していたのは、市の内外に多数存在している中小貴族たちであった。当時貴族という概念自体が甚だ曖昧であったことは、Danteがその『饗宴』の中でフェデリーコ二世が行った「古き富と美しい習慣」とに貴族性が基づくとする定義を否定し、個人の徳性のみが貴族性を決定すると論じているという事実によっても明らかである¹⁾。しかしDanteの行った定義が当時の一般通念ではなく、やはり市民たちによって貴族だと見なされている一群の人々が存在していたことは、G. Villaniがモンタペルティ戦について記した時、その犠牲者が“cavalleria (騎士層)”からは少なく(36人だとする)、“i migliori del popolo (ポポロの最上層)”から多数出た、とわざわざ区別して記していることなどによって確認しうるだろう²⁾。そうした市民の心中の区別の意識を最も見事に裏付けているノヴェッラが『三百話』の中にある。それはCLXXX話で、フィレンツェ市周辺で粘り強く抵抗し続けた由緒ある封建貴族の一員 Attaviano degli Ubaldiniが、一般フィレンツェ市民同様、市政府の正義の旗手に従って行列するのを見て、messer Giovanni de' Mediciが「Ubaldini家の人間ともあろう者が、こんな朝、我々の市の旗のお供をしに来ようとは、一体誰が想像しただろうか」と冷やかして、「それでは、Medici家の者が、フィレンツェのポポロ(政府)を転覆しようと望むなどと、信じられようか」と反論され、もはやことばに窮したという

エピソードである。ここで我々は、フィレンツェ市民が Ubaldini 家の階層と Medici 家の階層とを別の目で見えていたことを知るのである。この当時すでに Medici 家がフィレンツェでは押しも押されぬ有力者だったことは、LXXXVII のエピソードから推察しうるのであるが、その存在はあくまでポボロの一員としてであって、Ubaldini などとは格が違うことを指摘された結果、「黙ってしまった (ammutoiò)」というわけである。この階層の間の意識の差は、次節にくわしく紹介する『三百話』中の CXCIV において、落ちぶれた貴族の messer Valore de' Buondelmonti が、今ときめくフィレンツェの実力者 Piero degli Albizi に、相手が主宰した宴会の席で「君 (tu)」を使い、逆に Piero が m. Valore に敬語の「あなた (voi)」を用いている点からも推察できるであろう。

ところで、Pasquale Villari³⁾らによって近代的なフィレンツェ史研究が確立されて以来、中世末のフィレンツェ史は主に反封建闘争の過程として把握されて来たと考えても良さそうである。たしかに Ottocar⁴⁾の異議申し立ては衝撃を与えはしたが、それが実証的な研究の深化をもたらしたものの、反封建闘争史観に代る何らかの基本的な史観に発展しえたかどうかとなると甚だ疑わしいといわざるを得ない。それは反封建闘争史観にも完全に否定しえない有効性が認められることを意味し、Hans Baron⁵⁾や Holmes⁶⁾等の所論は、20世紀的な反封建史観という一面があることは否定できないのではあるまいか。本節のように貴族を扱う場合には、この封建制および封建文化との関わりは逃げることのできない問題である。そこで『デカメロン』や『ペコロネ』を素直に読むならば、そこには公然たる騎士道文化の讃美があり、貴族たちの寛大や優雅を学ぼうとする気風があることが認められるようである。制度そのものはさておいて、封建制の生んだ文化を積極的に評価していることは否定しえないように思われる。『三百話』では、前節に見たように、かなり歪んだ形での傭兵隊長への共感と共に、後で見る通り没落した市の周辺の貴族への軽蔑が認められ、また騎士道文化の模倣を嘲笑する。実はこれこそ当時の同市の状況の反映である。ベネヴェントの戦い以後のフィレンツェは、反封建闘争の旗手などでは全くなくて、ドイツの皇帝の基盤にまさるとも劣らぬ封建的基盤を持つフランス王家の王子のイタリアにおける王権確立に大いに協力し、10年にわたって主権すらゆだねていたという事実を忘れてはならない。またドイツよりもさらに発達していたと思われるフランスの騎士道文化を採り入れる際に、いわばイタリアに対する最大のパイプの役目を果たしたという一面は否定できない。反封建闘争の旗手どころか、フランス封建文化の最大の鼓吹者(だからといってその制度まで採り入れたとはいわないが)であり、南イタリアにおけるフランス王朝の宮廷(特にその財政面)の支柱の一部であったという事実を無視してはならないであろう。13世紀の後半にイタリアの封建的支配権がドイツからフランスへと移行したが、その変化に最も順応し、その先兵となって普及に努めたのは、モンタペルティ戦争で内部に大きな変質を体験していたフィレンツェに他ならなかったのだ。他のコムーネはその変化に順応しきれず、フィレンツェほどにはその変化から利益を得ることができなかったのである。このように考える時、フィレンツェ市民文化には、アンチ封建制どころではなく、むしろプロ封建制ともいえるべき性格がみとめられるのは当然であって、同市民たちの関心も反封建というより反ドイツか反フランスか、あるいは独立か

従属かという次元に終始する場合が多く、それを近代の研究者のように反封建とか近代の先駆者などと読み替えようとすると、昏迷を重ねる他はないという結果が生じるのである。

ところでフィレンツェが、いわばフランス封建文化の代理店的役割を果たした理由は、直接にはゲルフィ党の代表だったという歴史的経緯や、モンタペルティ戦以後多くの人々がフランスに亡命した結果の人脈、またベネヴェントの合戦でフィレンツェ出身の騎士団が活躍して恩を売ったことなど、いずれも軽視できない多くの要因が考えられるが、私はそれ以上にフィレンツェ市民がモンタペルティの敗戦によって蒙った精神的衝撃を重視しておきたい。教会に対する立場とか、帝政に関するイデオロギーなどというものは、状況次第でかなり簡単に変化するもので、Carlo d'Angiòと教会やゲルフィ党との関係一つ見ても、その時点毎に目まぐるしく変動している⁷⁾。Carlo d'Angiòがゲルフィ党と余りにも密接に結びつきすぎたため、法王使節はギベッリーニ党にてこ入れしている程で、また後にはゲルフィ党貴族がCarlo王を裏切ることもある。そういう意味で、Hans Baronの唱えた反独裁者史観なども、私には余りにも論理的すぎるように思われてならないのである。文化現象をイデオロギー的次元で行った説明は、一見鮮明な印象を受けても、実はむしろ様々な側面を持つ文化現象の結果の異った現われ方を結合しているにすぎない場合が少なくないからである。Villaniによると、モンタペルティ戦で、フィレンツェ方は2,500人が戦死、1,500人が捕虜になったと伝えられる⁸⁾。その死者の内厳密には何人がフィレンツェ市民であったかは不明だが、仮に2,000人がそうだとすると、当時の人口を60,000人と見て、30人に1人、つまり戦前の日本人を約1億人とする、333万人の死者が出たという割合になる⁹⁾。それがわずか一日の合戦で生じ、しかも貴族はほとんど助かり、ポポロの最上層の大半が倒れたとされている。Villaniの数字はあまりあてにならぬといわれているが(Schevilleの計算¹⁰⁾では死者は約1万人、捕虜は実に2万人だったとされている)、とにかく一日の被害としては驚くべきものであったといえよう。こうした惨害が生じた時、市民の間で生じるのはやはり何といっても指導層への不信感と、特にこの時のように特に必要もなしに他国を侵略して敗れた場合には、厭戦気分ではないかと思われる。この戦いでは、ポポロがはやり立って戦ったので、必ずしも貴族たちが主導したわけではないが、やはり職業的戦士である以上、大敗を喫した上に生き残ったのでは、市民の不信を集めたのは当然で、堅固な城壁を利用せずに逃走しなければならなかった。その後ベネヴェントの勝利でゲルフィ党が帰国してからも、フィレンツェ市は各コムーネのゲルフィ党連合の影に隠れて戦うようになり、戦闘態勢に大きな変化が生じたという説¹¹⁾もある。結局ベネヴェントの戦いでギベッリーニ党の基盤が崩れても、もはや市民の間にはかつての膨張主義的な好戦気分は残らなかったのだ。後にアルテを母胎とするプリオーレの政権が成立し、さらにきびしい反豪族(magnati)条項を盛りこんだ「正義の規定(Ordinamenti della Giustizia)」が成立するのも、傭兵制度が定着していくのも、やはりモンタペルティ戦の大敗による騎士階級への不信と厭戦気分が原因だと見るべきなのである。

さて三大ノヴェッラにおける中小貴族たちの姿は、今記したようなフィレンツェ市の状況をかなり明白に反映しているといえそうである。Boccaccioはすでに見たとおり、君主たちの寛大を描く

が、それはフィレンツェ市民が盛んに果した騎士道文化の鼓吹者としての役割りである。しかし市の内外で日常に接する貴族たちに対しては、それ程暖かい眼差しを当ててしているわけではない。また一見暖かい筆致で書かれていても、その背後にはきびしい現実が裏打ちされている。たとえば VI-4 のあずけておいた鶴の股肉を女友達に与えた料理人 Chichibio と、その主人 Currado Gianfigliuzzi の逸話など、完全な笑話となっているが、裏には貴族の暴力への怖れがある。あるいは VI-6 の加わりたくない仲間 (compagnia) に墓場まで追いつめられながら、うまい捨科白と共に逃れた Guido Cavalcanti には、はっきりと Donati 家と争う後年の白派の闘士の面影が重なり合っており、Boccaccio もそれを意識していたように思われる。恋する女の夫が外出中と知り、女の許に押しかける messer Lambertuccio は乱暴者そのもの (VII-6) だし、Adimari 家の Filippo Argenti は、Dante によって地獄に落されて (Inf. C. VIII) いる怒りっぽいので有名な騎士で、Biondello を殴りとばす (IX-8)。IV-9 の恋人の心臓を妻に食わせるプロヴァンスの騎士ほどではなくとも、Boccaccio が描いた貴族たちは、まだ一般市民をおびえさせるのに十分な凄味と迫力をそなえているといえる。貧困のため商人 (VII-8) や職人 (III-3) と結婚する貴族の娘たちもいるが、彼女らは相応のプライドと楽しむすべを心得ており、古い貴族階級が全く落魄した姿で描かれているわけではない。長年ナポリで過した Boccaccio が、フィレンツェとナポリの間のパイプ役を果たし、昔日の権威を少しも失っていない有力貴族たちを知っていたことや、比較的古い時代の貴族を取り上げたためこうした表現が生まれたらしい。

『ペコローネ』の場合も、後で再び詳しく論じる通り、フィレンツェ市民の事件に関しては14世紀の初頭までしか触れておらず、従ってフィレンツェ騎士の活動も、まずピサ十字軍に忠実に協力して軍規が厳正に守られたこと (XII-2) や、モンタペルティ戦争の際の messer Farinata degli Uberti の見事な計略の成功 (VIII-2)、Carlo d' Angiò 王のイタリア入りの際、特にベネヴェントの戦いにおけるフィレンツェ騎士団の活躍など (XXV-1)、ほとんどフィレンツェの騎士階級の叙事詩ともいえる描写が中心で (いずれも Villani の記述と重なっているのだが)、わずかに Corso Donati の失脚と死 (XXIV-1) あたりに騎士階級の没落と悲惨が描かれているに過ぎない。Boccaccio と『ペコローネ』の作者は、まさに沈没しつつある伝統的な封建貴族階級の最後の栄光の時期に焦点をあてたともいえるだろう。

それに対して、1400年に没した Sacchetti は、14世紀後半のフィレンツェの事件を中心にしつつ、それ以前の名士をも題材に取り上げたが、プリオーレ体制成立後約一世紀を経て、チオンビの反乱という激動期を越えたフィレンツェでは、14世紀当初にすでに兆候が現われつつあった封建貴族の子孫たちの窮乏が、まさにそのどん底に達していた。その端的な表現は、ウズラ狩りに出かけた市民の子弟たちが、Pantano で一夜の宿を借りた「Gianfigliuzzi 家の Curradino と呼ばれる貴族」の窮乏ぶりで、川を渡るのに馬が通れる橋すらなく、ブドウ酒がないのでブドウの房を水差しに入れて出し、何故か寝室も水びたしで、4人が小さなベッドに押し込まれる有様。唯一の利点は部屋の中で小便できるということ位だったという (CCX)。それにこりた若者たちは、その方向に向うプラ

ート門から出ることさえ避けたとされている。Boccaccio が描いた Chichibio の主人と同姓で類似の名前を持ち、勿論全く別人とされるが、一世紀後の没落した子孫の姿と見なしても差支えあるまい。こうした没落を避けるためには、実在の騎士である messer Ubertino degli Strozzi のように、あるいは Sacchetti 自身がやったように¹²⁾、市外の小都市の役人にならねばならないが、判決を下すのも生命がけで、無事に職務を果たすには才覚と労苦を要した (CLVIII)。そうした能力なしに生きるには、泥棒になる他なかったことは、豚泥棒を行ったためかえって損をした 2 件のエピソード (CXLVI, CCXIV) によっても明らかである。どちらの貴族も共に泥棒の常習犯だが、前者ではたまたま 1 頭分の入市税をごまかそうとしたため、市民に気付かれて露見し、後者では塩付け用の塩が不足して腐ったためにばれてしまうというもので、両者は持主に脅迫されていて、その具体的な叙述から、当時のノヴェッラのの一部が持つ記録的性格の強い作品である。盗賊とまで至らずとも、親戚の鼻つまみとして郊外で暮らす messer Valore de' Buondelmonti (CV, CXCI), いたずら者に鷲鳥を奪われて怒り狂い、嘲笑される messer Filippo Cavalcanti (CLXXXVI) 等々、れっきとした名家の末裔が変り者あつかいされる姿も見られる。こうした現在の窮状を通して眺めるため、過去の騎士たちの姿も見すばらしく見え、Boccaccio がかつてあれほど優雅に描いた Guido Cavalcanti も、子供に服のすそを釘付けされて身動きできなくなるし (LVIII), 剣技の名人 Matteo Cavalcanti は老いたためもあって、下バキの中にネズミにもぐりこまれて大あわてする (LXXVI)。ここには剣豪を憧れ讃美する雰囲気は全くない。もはや彼らには Boccaccio の作品に感じられたような怖さは全然ない。むしろ市民たちは騎士の弱体さを楽しんでおり、市きっての実力者 messer Pino della Tosa が「150人も兵隊がいれば、フィレンツェを取れそうだ」と言ったことを喜んで記録している (LXXIX)。勿論これはまだミラーノ等外国の脅威が顕著でないための余裕にもとづく冗談であるが、やはりフィレンツェ市民の中にこうした自国の弱体さを楽しむような精神構造があったことを無視してはなるまい。いうまでもなく、それはモンタペルティの衝撃が生んだ体制につながるものなのである。フィレンツェ市民たちは、かつて周辺都市の脅威であった強力な騎士階級を、歳月をかけて解体させていったのである。それに代って任命された新しい騎士階級は、画家に紋章を描かせたり (LXIII), 立派な兜飾りを作らせたりはしたものの、ドイツの騎士に挑戦されると戦わずして売り払うといった腰抜けぶり (CL), 道化師に酒手をまき上げられ (CLIII) ている始末である。しかし新しい騎士階級も無力ではなかったことは、長老に農民に「土地を奪うことが流行ならば仕方ありませんが」と訴えられて、土地を返還する Medici 家のエピソード (LXXXVIII) からその片鱗がうかがえるのである。彼自身も旧家の末裔で生き延びることに苦闘していたと考えられる Sacchetti は、騎士階級の没落を冷然と直視し、次のように総括する (CCX)。「今日貴族は大変隠者的な生活をおくっている。というのは貴族とよばれる人々は、強盗をするとか、何にせよ悪徳に充ちた非道な生活をしていて、くあいつだって貴族の家柄に属しているのだが」と噂される場合以外は、ものすごくつつましく暮しているからである。どうやら貴族という称号は、誰にせよ、何らかのこの上なく不潔な生活をおくっている人にふさわしく、持つべき以

上の物を持っている人にしか使えないようだ。だからダンテの〈徳のあるところどこにも貴族性がある〉¹³⁾という詩句は反対の意味で用いられているのである。」Sacchettiによってこのようにあっさりとは斬捨てられてしまうほど旧貴族層の多くが転落した原因を、単に従来考えられて来たような新興商人層の勃興等という経済的なものに求めるのは不十分であって、やはりこの急激な変化の基礎として、モンタペルティ戦以後の市民間の厭戦気分と、それに基づく軍事組織の変革、また市政全体における戦士階級の比重の低下、その結果生じた諸改革が戦士階級に与えた打撃（たとえば「正義の規定」における豪族[magnati]への逆差別的統制）等々一連の連鎖反应的諸結果を重視すべきである。当然失業問題も関係する。堅固な城壁に囲まれた中世都市の内部では、やはり市民の大多数から邪魔者あつかいされている場合は発展が望み難いのだ。それでも過去の栄光（特にベネヴェントの勝利への寄与等）のおかげで、Boccaccioが好んで取り上げた1300年前後の時代には、まだ旧騎士階級はある程度威厳を保ちえた。つまりフランスーナポリ両王国を軸とするフランス封建文化の普及者として、その両王国が健全な間は、その栄光を光背として利用しながらある程度の余命を保ちえた。『ペコローネ』が扱ったのもその時代のことである。しかし百年戦争の勃発でフランスの影響力が低下し、ナポリ王国も Giovanna I（1343年より82年まで王位）の乱行などにより混乱を極めたため、両王国の精神的権威は失墜する。かくして先に述べた反戦士階級的改革の諸結果は、緩衝物を失い、もろに作用する。新興市民層はこの戦士階級の弱体ぶりを知って笑いの種にする。地名にうるさく、登場人物の出身地にも気を配った Sercambi が、その『短篇集』の XCVI, XCVII¹⁴⁾で、軟弱極まりないフィレンツェ騎士を描いたのも、こうした経過の反映であり、証言なのである。

第四節 感情移入の対象としての主役——運命の力

以上述べて来たような精神的風土が成立すると、物語の主人公にも自ずから変化が生じる。その読み手あるいは聞き手は、モンタペルティーベネヴェント両戦争の結果生じた厭戦気分とポポロを見棄てて無事に生き延びた騎士階級への不信感とに基づく体制下で育ったために、中世叙事詩の享受者のように、戦士階級の英雄などを取り上げて、その内に理想の人物を見出したりは決してできない。勿論『ペコローネ』の一部の作品のように、Villaniの記した史実をネタにするような場合には、かなりすぐれた騎士像を描くこともありうるが、それはあくまで実在の人物としてであって、物語の主人公としてではない。また先に見たように道化師やいたずら者にも、かなり感情移入し、共感していることは否定し難いが、やはりそれが全人格的な感情移入かどうかとなると、疑問をはさまないではいられないであろう。もっとも Sacchetti のように、作風そのものが、登場人物に対する全面的な感情移入を許さない場合もある。実はイタリア文学史を通して、全面的な感情移入の対象とみなしうる人物が少ないことが、一つの特長とも感じられるのであって、それがこの国の文学があまり外国の青年たちを魅惑できない理由の一部を成しているのではないかと思われる。しかし幸い Boccaccio や『ペコローネ』の作者はそうした作品を少しは残して、そうした萌芽が発展すれば、かなり早い時期にすぐれた長編小説が成立しえたのではないかという夢に誘われる

のである。本節では、そうした数少ない登場人物たちを取り上げて、その共通点と、何故彼らが当時の読み手や聞き手の感情移入の対象たりえているかを考えてみたい。

まず主人公はフィレンツェ市民ではないが、後年の長篇小説を思わせる感情移入が顕著に行われている例を挙げると、II-4でラヴェッロ出身の商人が海賊に出会って一文なしになり、乗せられていた船が難破したため、ただ一人板子にしがみついて海上を漂う場面がそれである。「それにできるだけうまくまたがって、時にはこちら時にはあちらへと波と風とに押されるままに、夜が明けるまで持ちこたえました。夜が明けて、あたりを見回すと、彼が見たものはただ雲と海と一個の箱だけでしたが、その箱は海の波の上を漂って、彼をはらはらさせるほど近づいてくるのでした。それはその箱がひょっとして彼と衝突して、怪我をするのではないかと心配したからです。だから、いつもそれが近づいてくると、残されていたわずかな力をふりしぼって、それを遠くへ押しやったのでした。」この箇所などは、近代の長篇小説の心理的描写へあと一步のところまで近づいている。あるいはII-2の山賊におそわれたアスティ出身の商人 Rinaldo が、肌着一枚でロヴィーゴの周辺をさまよひ、カステルグリエルモの未亡人に助けられる話などにも、途方に暮れた商人にかなり深い感情移入が行われているといえそうである。フィレンツェ市民がこうした立場で登場するのは、今挙げた二つの物語には含まれたII-3で、旅の途中で、男装の英国王女に見染められて、何も知らぬままに同室に泊り、相手から実は女性であることを知らされる若い商人の物語である。この物語の場合は、若い商人 Alessandro を恋した英国王女の方でも、「神様は私にチャンスをお送り下さった。もしこのチャンスを逃がしたら、こんな好機はもうずっと戻るまい」と独白しており、女性に関しても感情移入が行われているのであるが、Alessandro に関しても、「Alessandro はとてもびっくりして、ひょっとしたら修道院長（王女の男装）は、不倫の愛のとりことなって、こんな風に自分を触り始めたんじゃないかと疑」いつつ、「手を修道院長の胸の上に置いてみると、まるで、しまっていて、品のよい全く象牙そのもので作ったような二つの乳房を見出しました」と、急転直下するまでの表現には、感情移入の余地を十分残している。この物語は、若くて苦境にあった一介のフィレンツェ商人が、英国王女に見そめられて、手腕家の伯爵になり、没落していた親戚も大富豪になるという、まさにフィレンツェ商人の夢そのものを語ったもので、読み手や聞き手の感情移入を誘うのは当然といえば当然であるが、実はこうした典型的な姿で大らかに夢を語っているケースは、中世のノヴェッラにおいてそれほど多くはなく、大抵変り者や愚者の出世話とか、珍談奇談の段階に止まり、主人公に感情移入の余地が乏しいケースの方が普通であるように思われる。実はII-3においても、II-2やII-4に比較すると、幸運を欲張って大げさに表現した分だけ、感情移入の許容度が低まっているように感じられる。『ペコローネ』においては、いずれもフィレンツェ出身者を主人公とするIII-1とIV-1が、特に感情移入の許容度が高く感じられる。実はIII-1は前述の『デカメロン』II-3の類話で、ある司祭が修道士姿に男装した貴婦人と一緒に旅をして、仲良くなった後、貴婦人の恋人である枢機卿の信用をえて旅の目的が成功するという、『デカメロン』よりもはるかに控え目な幸運の物語である。IV-1は、一部分が『ヴェニス商人』の下敷きになっ

たのではないかと見なされているので有名な話で、フィレンツェ出身の無一文の若者が、父の友人であったヴェネツィア商人に可愛がられその養子となり、航海に出て、女領主との賭けに負けて二度も商船を失うが、三度目によりやく女領主を妻とし、また妻の知恵のおかげで人肉裁判に勝って恩人の生命を救うというものであり、『デカメロン』II-3と並ぶ、フィレンツェ人の夢をのびのびと描き上げた作品といえるであろう。すでに指摘した通り、Sacchettiの作風は、こうした夢を盛ることを許さないように思われる。ところで今挙げた作品は、(ややそれに類似したAndreuccioを主人公とする『デカメロン』II-5も含めて)、『ペコローネ』のIII-1をのぞくと、総て主人公が商人である。唯一の例外のIII-1の司祭という職業も、相手の女性が修道士に扮した貴婦人という設定(これは『デカメロン』II-3で用いられた英国王女の修道院長への変装と対応するありふれた仮装)からの連想ともいえ、さらにこの司祭はお金の扱い方を知らぬ貴婦人に大金をまかされて正直に振舞ったことで信用を得ており、商人的性格を具えている。だから感情移入の対象は、当然予想する通りほぼ商人階級と見なしうるであろう。さらに彼らにはいくつかの共通点が認められる。まず大した家柄の出ではないこと。『デカメロン』II-3では「ある人のいう所ではLamberti家だが、他の人々のいう所によるとAgolanti家」とあり、もしLamberti家だとすると相当の家柄のようだが、この書き方ではむしろその曖昧さに力点がおかれ、もっと後にはAgolanteという名前の人物が出てくることによって、どうやら後者らしいという印象が強まる。要するにこの人物の家柄は、物語の展開にとって、どうでも良いことなのだった。それ以外の主人公たちに関しては、出身など問題にもならない。次に、全員が一文なしか、それに近い経済的苦境に陥ることも共通している。さらにそれを打開するための商才もなければ機略もない。『デカメロン』II-3のAlessandroは、たしかに多少気の利いた青年で、商才を発揮した時期もあった。しかしそれも一度戦乱の英国で逆境に出会うと、手も足も出ずに祖国に逃げ戻らざるをえなかった。『ペコローネ』IV-1の青年にいたっては、全く経済感覚が欠除しているといえる。勿論彼らに特別すぐれた才能があるわけでも、人並すぐれた技術を身につけているわけでもない。そして人並に失敗しやすく、また特に失敗から学ぶわけでもない。『ペコローネ』IV-1の主人公などは、同じ失敗を三度も繰り返しそうになり、親切な侍女の忠告でやっと免れる。とにかくこれらの主人公は、商人としての模範ではない。だが三つ目に、では騎士としての素質、特に戦士として武勇にすぐれているかという点、全員落第である。『ペコローネ』IV-1の主人公は、多少騎馬試合に活躍したようだが、それは彼の運命の打開に少しも役立たない。これまでないないづくしであったが、では彼らには何一つ積極的な素質はないのだろうか。いや、彼らに共通した性質が少なくとも二つある。その一つは幸運であること。何といってもこれが大きい。さらにもう一つは、その幸運が女性によってもたらされていること。要するに彼らは、大した取柄は何一つないのに、たまたま女性の好意を得ることによって、一躍幸運をつかむのである。実は、これは後の近代小説の主人公ともやや共通した性格だといえなくはなさそうである。彼らはいずれも、自らの手で運命を開拓したとはいえない。もっとも意志的に見える『ペコローネ』IV-1のケースでさえ、主人公は何らかの成算があって三度目の航海に出たのではな

い。ただ恋に目が眩んで、もう一度同じ失敗を繰返そうとしたに過ぎない。その行為は、『デカメロン』II-2やII-4などで、盗賊のため無一物になりながら、途方に暮れてさまよっている主人公と少しも違いがないのである。彼もまた板子につかまって波の上をあちこちと漂っているに過ぎないのだ。また彼らが一人ぼっちで、旅の空で、そうした運命に出会うという状況も例外なく一致している。

ところで翻って考える時、13世紀末以降の政治＝文化体制の形成の契機となった、モンタペルティとベネヴェントの両合戦の経過は、何とこれらの主人公たちの運命の転換と似ていることであろうか。モンタペルティの戦いはまさに欲に駆られた無名の師そのもので、その結果フィレンツェは存廃の危機に立たされたが、予期されなかったベネヴェントの戦いの結果、フィレンツェはトスカーナの盟主に返り咲いたばかりか、以前よりはるかに将来性の豊かな地歩を確立しえている。それは自力によったのではなく、主にフランス出身の Carlo d' Angiò の活躍によっている。前述の主人公たちが女性のおかげで運命のどん底から立直るのと何と似ていることであろうか。フィレンツェの共和制も、実はこういう危険な綱渡りを経験した後によく成立したのであった。もしベネヴェントの戦いがなければ、いずれはフィレンツェに類似の体制が成立したとしても、はるかに長い混乱が強いられ、またあれほどの国際性は決して持ちえなかったであろうし、もっとはるかに警戒心の強い、その分だけ防御中心に固まった体制が生れたに違いない。白黒闘争等多くの紛争を体験したとはいえ、国際的で開放的な性格を保ちえたのは、フランスーナポリの両王国およびその勢力下におさえこまれた法王庁との外交関係が、ほぼ一貫して友好的で安定していたことと無関係ではない。その基は勿論あの二つの戦争の結果にあったのだ。こうした歴史経過を原体験として持つフィレンツェ共和国の市民は、おそらく前述のごとき一見他愛のない幸運物語も、荒唐無稽な絵空事とは笑いとばせなかったはずである。要するに歴史に必然などはないのであって、国民が幸運を信じている国は、幸運に巡り会えるといえそうである。フィレンツェ共和国は、その後も何度か似たような幸運を体験する（たとえば Giangaleazzo の急死や Lorenzo の対ナポリ王交渉など）が、悔い改めて幸運が信じられなくなると崩壊に至る。全体主義国家のプロパガンダには歴史の必然は厳然と存在しているが、フィレンツェ共和国の実際の経過には必然性など全然なかった。ゲルフィ対ギベッリーニ闘争、白黒闘争も必然ではなく、ましてやモンタペルティとベネヴェントの戦いは、その発生も経過も結果もすべて運命のいたずらそのものに他ならなかったのである。しかもその運命のいたずらこそ、フィレンツェ共和国の将来の性格に決定的な影響を及ぼしたものであった。

こうした原体験を共有している市民なので、三つの作品では多様に運命のことが語られる。すでに見てきた通り、運命のいたずらがなければ、フィレンツェはごくありふれたイタリアのコムーネの一つとして、何人かの芸術家や文学者を偶発的に生みながら、あれ程には飛躍することなく今日に至ったはずであるから、これは当然のことといえよう。たとえば Boccaccio が運命を極めて重視していたことは、第二日と第五日に幸運を、また第四日に不運を主題として、10人の語り手たちが語っていることから明らかである。運命こそ Boccaccio 研究の最大のテーマであって、その文献は

膨大である。『ペコロネ』の作者 ser Giovanni Fiorentino はといえば、やはり運命、とりわけその予言への関心が極めて深く、Giovanni Villani が記録しておいたスペインの Ferdinando 三世が手に入れた予言の書の話 (XXII-1) や、シエナの政治的指導者 Provenzano Salvani が、悪魔が行った予言をあてにして戦い敗北を喫して死ぬ話 (XXI-1)、Manfredi が出陣の直前、兜飾りが落ちたので死を予感する話 (XXV-1) などを、取り上げている。またすでに見た通り、Boccaccio の運命に関する話と極めて似たノヴェッラ (III-1) を書き残した。Sacchetti にも運命や予言に対する関心は非常に顕著なるものがあつたことは確かで、たとえば私などには極めて興味深く、彼としては珍しく民話的性格の濃厚な CCXVI のような作品がそこから生れている。それは旅の途中にあつた Alberto Magno がポー河畔の貧しい宿屋のために、木の魚を作ってやった話で、それを漁網にしばりつけておくと、いくらでも魚が取れた。だがある日ひもがとけて木の魚は流れ去り、魚が取れなくなる。宿の主人がわざわざドイツへ赴いて、もう一度木の魚を作るように頼むと、Alberto Magno は、天体の配置が3万6千年後にならないと元に戻らぬ故、もはや作れないと断る。その最後に Sacchetti は、「我々のあらゆる出来事を考えると、運命や時機が我々に与えてくれる時にそれを取らない者は、大抵の場合、考え直してもう一度望んだとしても、賢人が告げられた通り、3万6千年待たないと見出せないだろう」とコメントし、さらに「今日息子たちが売ることも質に入れることもできない財産（信託遺贈財産）を残した人は、私に言わせると、息子たちが彼らの財産にめぐり合おうとしても、3万6千年待たねばなるまいという意見を信用せざるをえないだろう」ときわめて実地的な忠告をも加えている。『三百話』には、フィレンツェ人の運命観をさらにはっきりと証言しているノヴェッラが見られる。それは CXCI 中で、フィレンツェの没落貴族 messer Valore de' Buondelmonti が、当時最大の実力者でその後のチオンの反乱で斬首された Piero degli Albizi の宴会に、招かれもしないのに大釘を持って出席する話である。彼は凱旋将軍が思い上ることを避けるため、ローマ人たちは入城の際二人のならず者を同じ馬車に乗せて罵倒させたという故事を紹介した後、自分が Piero に対してならず者の役を引き受けたいと述べた挙句、「というのも、私は君 (tu) がこれ以上昇れない程の高みに上っていることを見ているからだ。私は君が運命の輪の頂上にいて、もう降りないかぎり、それも真逆様に転落しないかぎり、身動きできないということを、あんまりはっきり見ているからだ。そういうわけで、私は君に運命の輪を止めてもらおうと思って、あそこの暖炉の所にあるあの大釘を持って来たんだよ」という。それを聞いた Piero degli Albizi は、さすがに少しもさわがず、「私はあなた (voi) が示されたような位置の半分にも達していません。だがもしもその輪を釘付けするようなことが可能だとしたら、鉄の値段の相場が、黄金と同じ位に上るでしょう。と申しますのは、それを釘付けしたいと思う人がとても大勢いて、この地上にある鉄が全部その輪の中に打ちこまれてしまうからです。おまけに、もしそれを釘付けすることが可能だとしたら、輪の下や中程や側面などにしがみついていた、事態が好転するようにそれが回るのを望んでいる人々にとっては、この上なく不正なことになるでしょう」と答える。そして messer Valore が帰路につく時、「あなたの釘を持って帰って下さい。何故なら私はあなたに言われた場所へ

打込むことはできませんから。と申しますのも、取るに足らぬ私ごとき人間だけではなくて、Cesare や Alessandro 大王やその他のいろいろな人々にも、それを釘付けすることは不可能だったからです。またたとえ可能だとしても、私は世界が滅びてしまわぬよう、そうしたいとは思いません」と言いつつ大釘を messer Valore にわたして持って帰らせた。

その後に加えられた Sacchetti 自身のコメントこそ、まさに当時のフィレンツェ人の運命観の証言といえるだろう。すでに見た通り、彼らの市の体制そのものも、運命のいたずらの成果であった。そのことを彼ら自身最もよくわきまえていたのである。

「ああこの輪以上に確実なものがあるだろうか。それは廻り廻って休んだことはなかった。いかに多くの王たちや君主たちや、人民やコムーネの党派がそのことをすでに体験したことだろう。見れば見るほど、信じがたくなる。高い地位にある人は、決して落ちることを考えない。昇れば昇る程、転落の危険は強まる。(中略、Sacchetti は Carlo III, Bernabò, Scala 家の君主たち、Pietro Gambacorti ら当時運命の急変した君主たちの名を列挙する。) 高い地位を失う危険のない人は幸いなるかな。また君主の地位になく、それを失うことを恐れたり心配したりしなくてすむ人も。だからある哲学者は、地上で一番幸運な人は誰かと問われた時、〈君が一番惨めだと信じている人〉と答えたのだ。このことばに注目し、精神の目でよく考察するならば、貧しく生まれ、生き、死ぬ方が、金持に生まれ、豊かに暮らし、大層な地位について、大変な心労と疑惑に悩まされ、そして多分最後には貧窮の内に暮らすよりも、はるかにましだろう。」しかし最後の一句は、単なるあきらめに終わっていないことも興味深い。運命の輪が廻るということは、どん底からの上昇の可能性をも意味しているのである。「だから地位や富を望む者は努力したまえ。なぜなら結局この世は各自の者にその労苦の支払いをしてくれるのだから。」一見徹底的なペシミストのような口ぶりの Sacchetti が加えた、この唐突な感じのするコメントは、何度も予想を上回る好結果で逆境を切り抜けたフィレンツェ市民にまことにふさわしいものであることが、これまでのいくつかのノヴェッラの証言によって明らかなはずである。

(以上で第二章 第四節おわり。同章 第五節および第六節の掲載は次回にまわす。)

第三章 三大ノヴェッラ集よりえられるフィレンツェ史に関する 体系的情報について

第一節 『ペコローネ』より知られるフィレンツェ史の変革期

すでに記したとおり、『ペコローネ』という作品は実に奇妙な内容構成を有しており、当初の十数篇はほぼ純然たるノヴェッラ集の趣きで進行していながら、やがて同時代の記録的エピソードに移り、さらに前時代のフィレンツェ史上の事件を扱った Giovanni Villani の『年代記』を下敷きとしたと見られる歴史的エピソードに転じ、時折はノヴェッラや他の話題を扱うことはあっても、ほぼ

一貫してフィレンツェ史を扱うに至る。Enzo Esposito の校訂版の解説¹⁵⁾によると、全50篇中実に32篇までが、G. Villani に基づく作品とされており、その事実は当然この作品のノヴェッラ集としての価値にとって致命的欠陥となっているといっても過言ではあるまい。しかし本論のようにノヴェッラ集を中世フィレンツェの社会精神史的資料として解説しようとする場合には、その事実が貴重な手がかりを残してしてくれることを今さら改めて述べる必要もない程である。何故ならこの作者は、かなり大部の G. Villani の記述の中から、興味深く感じた部分を選択しているのであり、またその記述を丸ごと転写しているのではなくて、いくつかの部分を組み合わせて一篇の作品を構成しているのであって、この取捨選択と編集の作業には必ず作者自身の歴史意識が働いており、逆にその結果からその歴史意識が推測できるはずだからである。こうした仮定の下で、『ペコローネ』の作者 ser Giovanni Fiorentino が選択したフィレンツェ史関係の事件とあわせて、市外の歴史関係の事件を拾い上げていくと、我々は不可解な一種の謎ともいえる現象を見出すのである。すなわちこの作品が書き始められたのは、その序文¹⁶⁾に従うならば、1378年フォルリ市領内の小村 Doàdola に滞在したころ、法王は Urbano VI、皇帝は Carlo IV の時代であったとされており、また VI-2 の messer Bernabò、VII-2 の法王 Urbano VI の選出(1378年)後あいさつに行ったというリーミニの領主 messer Galeotto Malatesti など、ほぼ同時代人を登場させた作品を混えており、作品中に採り上げられた事件で年代が確定しうるもっとも遅いもの(それ以前には作品が完成していなかったことが分る)は、VI-2 の messer Bernabò の残酷な処刑で、『ミラノ年代記』中の1381年の出来事とされている¹⁷⁾。しかし、実際にそれが書かれたのは、内容が暴君のスカンダルなので、その死後、すなわち1385年以降(m. Bernabò は1385年5月に甥に騙されて捕えられ、同年12月に殺されている)の可能性が大きいと見なされている。しかし問題をフィレンツェに限定すると、扱われている事件ははるかに古いものになる。まず14世紀に入ってからのものである。ごく断片的な記述にすぎない Arrigo di Lunziborgo (ルクセンブルクのハインリッヒ帝)が1308年に皇帝に選ばれ、トスカーナ、特にフィレンツェを包囲したが陥落させえず、1313年に没したという記事(XVIII-1)が最も遅いもののようである。まともに扱ったものといえば、XXII-2の1304年5月1日、フィレンツェ市民が五月祭を楽しんでいた時、市民が多勢 Carraia 橋に上りすぎたため、橋が落ちて市民が多数溺れ死んだという記事と、XXIV-1の1308年における Corso Donati の死の記述位に限られてくる。XVIII-1の記述は、Carlo IV (1378年没)に至るまでの一連のドイツの皇帝達を簡潔に列記しただけの一覧表のごときもので、しかもフィレンツェに関係しているとはいえ、厳密に言えば市外の出来事である。だがたとえそれを含めても、執筆が開始されたという1378年までの間には、実に65年の空白がある。厳密に Corso Donati の死までさかのぼると、その差は70年に及んでいる。この空白こそ私の疑問を抱いている謎なのである。

ここでまず考えられるのは、文献学的な説明であろう。すでに見た通り、作者は G. Villani の『年代記』に大幅に依拠していたので、何らかの事情でこの約70年分は利用できなかったと考えるわけである。清水広一郎氏の著書¹⁸⁾によって周知のごとく、『年代記』は Villani 家の一族で書き継がれ

たが、Giovanni が1348年1月のフリウーリの大地震まで書き続けた後、同年のペストで死去し、弟 Matteo が1363年分まで書き、1364年分は Matteo の息子 Filippo が記したとされている¹⁹⁾。すでに Giovanni の執筆中に、その一部は流布していて、Dante でさえ利用した可能性があると思なされているので、ser Giovanni Fiorentino の手許に、Dante が入手した程度の部分だけが存在していて、それを彼が下敷きにしたとする説明である。

しかし実は、その説明を完全に不可能とする証拠が、少数だが確実に残っている。たとえば、次のA文とB文とを比較する²⁰⁾と、ほぼ同一であり、一方が他方を写したことに疑問の余地がない。

A文

Nel detto anno 1333, si piuviçò per papa Giovanni appo Vignone, con tutto che più di due anni dinanzi l' avesse conceputo e trovato, l' opinione della visione dell' anime quando sono passate di questa vita, ……

B文

Nell' anno MCCCXXXIII si piuviçò per papa Giovanni appo Vignone, con tutto che più di due anni dinanzi l'avesse conceputo e trovato, l'oppenione della visione dell' anime quando sono passate di questa vita, ……

A文が Giovanni Villani の『年代記』の第X巻 CCXXVI章である以上、B文を記した ser Giovanni は、少なくとも『年代記』の30年代の初頭を扱った部分を持っていたか、あるいは見る機会があったことは確実である。これほど明らかではないが、他にもフィレンツェに無関係な記事の中で、やはり G. Villani の記述に頼ったと思われるものがあり、たとえばドイツの皇帝達に関しては簡潔な説明が ser Giovanni の生きていた Carlo IV まで列記されている。恐らく Villani の第IX巻 CLXXV章の記述を通して知ったと思われる、Osterich 公が Baviera 公に敗れた戦い(1322年)なども、XVIII-1話に採り入れられている。だから、G. Villani の『年代記』の14世紀の当初以後の部分で、ser Giovanni が利用できなかったという説明は成立しえない。

もっとも ser Giovanni が、Villani の『年代記』のある部分までは手許に持って自由に利用したが、他の部分は手許になく、時たま利用したという説明が成立つかも知れない。しかしその場合には、前に挙げた二つの記事とほぼ重複する所にフィレンツェを大いに悩ませたルッカ領主 Castuccio Castracani (1328年9月3日没)、あるいは特に Machiavelli の興味を惹いたらしい1342～3年の独裁者 duca d' Atene、あるいは1333年にポンテ・ヴェッキオをも押し流した大洪水等が、何故 ser Giovanni の興味をかき立てなかったのかという疑問が生じる。さらに、1380年代の独裁者の行動にまで触れるのなら、Villani の下敷きはなくとも、14世紀後半のフィレンツェをゆるがしたチオンピの反乱や、その直前の八聖人戦争などに何故全く触れようとしないのか。こうした疑問を説明するのは、先に挙げた写本の欠除などといった単純明解な即物的仮説では不可能であり、やはりそこには作者の意図が働いていたと思なさざるを得ない。すなわち ser Giovanni は、フィレンツェ史に関して、意図的に約70年間の空白を作ったのであって、Villani の写本を利用しえたにもかかわらず、わざと Corso Donati 以後の時代のフィレンツェ市内の事件を扱うことを避けたと思なすべき

なのである。いわば作者の編集方針によってこの空白が生じたのだが、一体その編集方針とは何か。それを解く鍵は、作者によって選ばれた、フィレンツェ史関係の事件とその配列の内にあるのはいうまでもない。フィレンツェ市の起源に関しては、周知のごとく G. Villani の記述がフィエーゾレ市の起源に関する記述に接続している²¹⁾ので、両市に関連した事件の主なものを選び、作品の順序を横軸に取り、年代を縦軸に取って示すと、第1図の通りになる。この図によって、執筆当時作者が抱いていたと思われるフィレンツェ史叙述の方針を推理してみよう。まず作品の当初の約10話には、フィレンツェを舞台とするものが2、フィレンツェ人を登場人物として活躍させているものが5存在するが、Villani を下敷きとしているものは皆無であって、ほぼ一貫して Boccaccio の影響が著しい。それが第6日目あたりから変化して、VI-2 の Bernabò の残酷話や、VII-2 のリーミニの領主の姪への制裁などといった歴史的エピソード中心の物語に移り、やがて VIII-1 で、G. Villani を下敷きとするフィレンツェ史関係の物語が始まり、VIII-2 ではモンタペルティ戦争の経緯を語る。そこで一度は当初のごとき架空の物語に逆戻りした後、X-2 のローマ建国および XI-1 のローマ市民による Catilina 時代のフィエーゾレの破壊とフィレンツェ建国の記述において、Villani を下敷きとする歴史的エピソードに再着手する。その後時代順に記述をすすめ、白黒闘争(1301~2年にピーク)までくると、その後の3話で13世紀末より14世紀当初の Bonifazio VIII や法王庁のアヴィニヨン捕囚をめぐる叙述がなされた後、再びバベルの塔の時代まで舞戻って、フィエーゾレの建設から XVIII-1 のドイツ皇帝の事蹟(フィレンツェに関しては Otto I 当時が重視される)等を経つつ、三度目のほぼ時代順の下降を行っている。その後は大体13~4世紀のフィレンツェ内外の事件を時代を上下しながら扱っている。なお XXV-1 は、ナポリの Angiò 王家の祖とな

第一図

日	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI	XXII	XXIII	XXIV	XXV
番 号	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1
古代 と 帝政末期																									
中世初期																									
1000																									
1100																									
1200																									
1300																									
執筆																									

った Carlo d' Angiò の生涯を扱っていて、全566ページ中の92ページ、すなわち16.25%、約6分の1にも及ぶ量が割り当てられている。その物語が終った後、聞き手の修道士が「この最後のノヴェッラは、私の語ったすべてのノヴェッラに匹敵します」と賞讃しているが、それが嘘やお世辞とは決して思えない豊富な内容の作品で、『ペコロネ』の Villani に依拠した作品群の中のクライマックスとも締めくくりとも見なすことができるであろう。ただし『ペコロネ』はこの力作で終るのではなく、その後にもう一つ、男の性器がその死後も勃起したという、ふざけた小話が加えられていることも忘れてはならないであろう。

こうした構成を辿る時、そこから幾つかの作者の意識を探るための手がかりが見出される。第一に、Villani を下敷きにした作品群は、ゲルフィ党対ギベッリーニ党の争いの開始および、モンタペルティにおけるゲルフィ党およびポボロの軍の大敗で始まり、モンタペルティ敗戦の結果を帳消しにして、むしろ禍を福に転じたベネヴェントの戦いの立役者 Carlo d' Angiò の伝記で終わっており、始点と終点には明らかな対応関係があること。第二に、作品の後尾に集中している13世紀末より14世紀の初頭の事件に基づく作品は、両戦争の結果が生んだ社会変化の諸側面を示しつつ、その後かなり永続する市の体制（政治面ではブリオーレ・正義の旗手の政府が代表するもの）の成立過程を描いていること。ただしあくまで変革期の段階が対象であって、フィレンツェ市内の事件の下限が1308年の Corso Donati の死の叙述であることが、この作者の関心の限界を指示しているといえる。この時期以後、時たま動揺することはあっても、市政はほぼルティーンな日常生活の一コマに組みこまれたのであり、作者はそれを意識していたのである。第三に、フィレンツェ市を題材とした作品群の配列に見られる、驚くべき単純さも、やはり手掛りである。作者は三度（正確にはむしろ二度プラスアルファ）に亘って、フィレンツェ史を下降する。そのために二度、起源に向って同じようなジャンプを繰返しているが、それには原初回帰とか、根源への帰還などといった性格は乏しく、一応知的対象として光をあてたに過ぎない。それ自体が目的ではなく、あくまで助走であって、主体は13世紀後半より14世紀にかけての時代である。もし作品が現在の配列順に作られたとすれば、VIII-1 および VIII-2 の時点ですでにこの対象は意識されていたといえる。

この作品の分裂を指摘するのは容易だが、上述の手がかりから見て、フィレンツェ史関係の叙述では、かなり明確な構成意識が読み取れるはずである。ところで、作品全体の構成を考えると、当初 Boccaccio の影響の著しい作品を10余篇創作した後、Villani の安易な敷き写しに逸脱したという印象が否めないかも知れない。だがそれは、あくまでノヴェッラ集としての基準に立つ見方である。作者が無自覚なままこのフィレンツェ史の変革期に対する強い表現意欲を抱きつつ、この作品に着手したと考えればどうであろうか。作者は、当初はノヴェッラ集のつもりで書き続けるであろうが、途中で自分が沃野だと信じる方向を目ざして進路を変えるであろう。この作品にはその趣きが強い。しかし自覚的に着手されていても構わない。その場合には、枕のつもりでつけた舞台設定や前座的なノヴェッラに多少力を入れすぎたということになる。いずれにせよ、作者の意識の中には、彼が生きている日常的なフィレンツェとは一応切りはなされている、一本の太い帯のようなフィレンツェ

の変革期のイメージが存在していて、その基本の部分にモンタペルティとベネヴェントの戦争が位置していたのであり、その鮮烈なイメージが、一見奇妙な構成の作品の創作に彼を導いたということに違いはないのである。こうしたフィレンツェ史の変革期のイメージは、Dante をはじめ14世紀のフィレンツェ人には大体共有されていたものと見なしえるだろう。しかしそれは15世紀に入ると好まれなくなる。フランスの影響力の低下と共に、このイメージはあまりにも屈辱的なものを感じられたに違いないからである。こうしてモンタペルティとベネヴェントの戦争の意味も抹殺され、あるいは忘れられて、新しい自治都市のイメージが取って代るが、その抹殺と忘却については別の機会に論じたい。

〔注〕(三大ノヴェッラ集からの引用は、原則として文章内の作品番号で代用する。)

- 1) Dante Alighieri, *Convivio*, Firenze 1964, Parte II, p. 26. なおこの点について拙稿「ダンテの作品における家の意味(1)」(『イタリア学会誌』24号京都 1976 所収) 参照。
- 2) Villani, op. cit., Vol. II, Lib. VI, Cap. LXXVIII, p. 111.
- 3) Pasquale Villari, *I primi due secoli della storia di Firenze*, Firenze 1904 (初版は1893) に含まれた一連の研究。
- 4) オットカール 著, 清水・佐藤訳『中世の都市コムーネ』東京 1972。
なお Ottocar は, 注3の Villari の書に序文を付し, 「歴史的に誤った概念に発しているも, 真実らしさと記述上の説得性を持つ」(p.VII) と評している。
- 5) Hans Baron, *The crisis of the early Italian renaissance*, New Jersey 1966 等で論じられた主張。
- 6) George Holmes の説は, John Larner, *Culture and society in Italy 1290-1420*, New York 1971 より知ったが, 注5の説が対 Visconti 戦争を重視するのに対し, 対法王庁戦争を重視。
- 7) Carlo d' Anagidò 王がナポリ王位についた当時の法王 Clemente IV (1265-8 在位) 時代にすでに, 法王庁との対立が生じ, Gregorio X と Niccolò III は, その党派対立解消政策で Carlo 王の勢力削減をはかるが, 1282年 Sicilia 晩禱事件では, Martino IV が Carlo 王を支持した。
- 8) 注2 参照。
- 9) ちなみに『国民百科事典』, 東京 1977, 第8巻, 443ページによると日本では「太平洋戦争の結果, (中略) 約310万人もの人命が失われ」とある。
- 10) Ferdinand Schevill, *Medieval and Renaissance Florence*, New York 1963, Vol. I, p. 131.
Schevill はゲルフィ軍を7万と見る。もしこの数字を信じるならば, フィレンツェの死者は少なくとも3倍位には増加, 10人に1人という高率に達する。
- 11) Nicolai Rubinstein 編, *Florentine Studies, Politics and Society in Renaissance Florence*, London 1968 所収の Daniel Waley, *The army of the florentine republic*, p. 83 および同ページの注1中の Previté-Orton の所説に基づく。
- 12) Franco Sacchetti は, 1385年以降 Bibbiena, San Miniato, Faenza, Portico 等々で podesta や vicario 役ににつき, 1400年68才で vicario に赴任した San Miniato でペストにより没した。
- 13) Dante Alighieri, *Convivio* 所収 Terza Canzone の第六節の冒頭の詩句。
- 14) Giovanni Sercambi, *Il Novelliere*, a cura di L. Rossi, Roma 1974 所収のノヴェッレ。
- 15) Ser Giovanni Fiorentino, *Il Pecorone*, a cura di Enzo Esposito, Ravenna (印刷は Perugia) 1974の introduzione 所収 pp. XVIII~XXII の tavola による。
- 16) id. pp. 3~4.
- 17) 注15の p. XVII.
- 18) 清水広一郎, 中世イタリア商人の世界, 東京 1982の VII, X, XII 章。
- 19) *Dizionario Letterario Bompiani*, Autori, Vol. III, Milano 1969, pp. 818~9 の記述に従った。
- 20) A文は Firenze 1823年版の復刻版 Tomo V, p. 286, B文は, 注15の版, XX-2の冒頭部, pp. 426~7.
- 21) 注18の著書, pp. 181~94, 特に p. 185 による。

(未完)